

# 言語社会における語彙の多様性

高 永 茂\*

## Variations of Lexical Items in a Community

Shigeru TAKANAGA

### 1. はじめに

方言を記述することの意味が次第に複雑になってきている。今回報告する東広島市高屋町を例にとると、(A)広島県の高屋町方言を記述する、という言い方と、(B)広島県高屋町の方言を記述する、という言い方ができる。しかし、(A)と(B)とでは、いささかニュアンスを異にする場合がある。人の移動が少なかった時代には、(A)と(B)とが、ほとんど同義として受けとられたであろう。しかし現在では、この二つを判然と区別して、調査・研究に取り組まなければならない状況も起きています。

(A)は、高屋町の伝統的な(土着の)方言を記述することであり、対象者は高屋町生え抜きの古老ということになるか。これに対して、(B)は、高屋町に現存する方言を記述することであり、高屋町方言に限定されない場合がある。対象者も、高屋町生え抜きではなく、現在高屋町に居住している人となろう。そこには、男性、女性、さまざまな年齢層と出身地の人が含まれることになる。

人口の移動が多くなるにつれ、一つの地域社会も出身地の異なる人々によって構成されることが当たり前になってきている。地域社会の方言を、その社会の個々の話者(構成員)が話していることばの総体としてとらえるとき、方言の中身も複雑さを増してくる。地域言語が、複数の異質なことばによって構成されると考えられるからである。このとき、一つの地域社会に、ある時点で、いったい、いくつのことばが共存しているのか、という点に興味を持たれる(注1)。

本稿で分析する方言事象は、17項目の語彙である。個々の話者の言語体系を記述することは大変困難なの

で、分析する方言事象を語彙の一部に絞っている。語彙は、音声やアクセントに比べて、体系をなしにくいいため、扱いにくい面がある。しかしその半面、分析の切口を変えることによって、さまざまな姿を見せてくれる。語彙には、音声やアクセントよりも、話者の生活が反映されやすい。また、分析対象者は、広島県出身者であるが、高屋町(東広島市)出身者だけではない。県内各地の出身者が含まれている。性別は限定していない。年齢は、20歳代以上の各年齢層を網羅している(ただし、20歳代がやや少ない)。

本稿においては、さまざまな属性を持つ対象者から得られた資料をもとに、一つの言語社会の語彙を記述する際に、どのような特徴を示すか、またどのような問題が生じるかを検討する。

### 2. 調査の方法

#### 2.1 調査対象地

高屋町は相当に広い地域であるため、高屋町全体を調査対象とすることは、調査期間・費用・人員の面で不可能であった。また、全体を対象にせずとも、高屋町を代表するような地域を選べば、高屋町在来言語

(注1) 国立国語研究所が行った白河市の調査報告書には、「白河市に昭和24年(1949)10月現在居住する人人の言語の実態をつかむのがこの調査の目的であるから、」という記述がある(国立国語研究所、1951)<sup>1)</sup>。国立国語研究所の報告書には、④. フィールドワークによって多数の変種をみつめる、⑤. 統計学の方法を用いて対象を求め、データを要因分析の手法によって計算的に処理する、といった特徴がある(真田、1990)<sup>2)</sup>。そのため、回答者数の少ない回答は、「その他」として処理されることが多いようである<sup>1)</sup>。本稿のように「異なり語数」を問題にすることは少ない。

\* 教養教育

表1 広島県出身者の性別、年齢別構成

|            | 20歳代 | 30歳代  | 40歳代  | 50歳代  | 60歳代以上 |
|------------|------|-------|-------|-------|--------|
| 男 性 (288人) | 2.1% | 14.6% | 31.2% | 22.9% | 29.2%  |
| 女 性 (300人) | 2.3% | 20.0% | 32.4% | 23.0% | 22.3%  |

使用者から十分な数の回答を得られると考えた。そこで、今回の調査の対象地域は、高屋町を含む東広島市を詳細に記した『戸別記入 東広島市精図』（1988年、中国地図出版株式会社）に記載されている地域のうち、図58, 59, 62, 63に含まれる地域とした。実際には、西高屋駅前を中心に南北に2.5km, 東西に3.5kmの地域である。ただし、この地域にある在来の集落と、社宅や新興住宅とを区別して調査している。今回報告するのはおもに、在来の農村型集落（以下、自然発生的集落とよぶ）を対象とした調査の結果である。

なお、1987年には高屋町にあるマツダ株式会社の社宅（以下、マツダ社宅とよぶ）を神鳥武彦と筆者が共同で調査した。社宅を対象にした調査については、神鳥・高永（1991）<sup>3)</sup> をご覧いただきたい。

## 2.2 調査票の配布と回収

調査では、上記の地域に含まれる全ての家庭を対象とした。各家庭の「御主人」と「奥様」から回答を得るようにした。調査票の配布と回収の詳細についても、神鳥・高永（1991）<sup>3)</sup> をご覧いただきたい。

配布した調査票の総数は、1010部（約505戸に配布）である。このうち、回収できた数は、695部である。回収率は、68.8%となる。

在来の集落なので、圧倒的に広島県出身者が多い。広島県出身者の回答は、588部であった（広島県出身者は全部で601人であったが、回答に記入もれがあるなどして13人の回答は全く分析に使用できなかった）。

なお、広島県出身者の性別、年齢別の構成と出身地域は〈表1〉、〈表2〉のようになっている。

## 2.3 質問文の内容

高屋町調査で使用した調査票は、全四節59項目から成っている。第一節から第三節までは、広島方言の使用状況を質問している。第四節では、回答者の性別、年齢、出身地などのいわゆるフェイス・シート（八項目）に関して質問している。本稿で取り上げるのは、このうち第一節の一部と第二節で質問した計17項目の分析結果である。17項目を、その項目を代表する名称

表2 広島県出身者の出身地域

| 郡・市  | 数   | 割合 (%) |
|------|-----|--------|
| 広島市  | 43  | 7.4    |
| 東広島市 | 359 | 61.4   |
| 廿日市市 | 2   | 0.3    |
| 呉市   | 22  | 3.8    |
| 竹原市  | 9   | 1.5    |
| 福山市  | 3   | 0.5    |
| 三原市  | 10  | 1.7    |
| 尾道市  | 4   | 0.7    |
| 三次市  | 2   | 0.3    |
| 安芸郡  | 14  | 2.4    |
| 芦品郡  | 1   | 0.2    |
| 賀茂郡  | 66  | 11.3   |
| 甲奴郡  | 1   | 0.2    |
| 佐伯郡  | 9   | 1.5    |
| 世羅郡  | 2   | 0.3    |
| 高田郡  | 6   | 1.0    |
| 豊田郡  | 17  | 2.9    |
| 比婆郡  | 3   | 0.5    |
| 深安郡  | 1   | 0.2    |
| 双三郡  | 2   | 0.3    |
| 御調郡  | 5   | 0.9    |
| 山県郡  | 4   | 0.7    |

注：不明3名

を付して列挙する。

- 「はぶてる」
- 「やねこい」
- 「自転車」
- 「へんてこりんな（もの）」
- 「大きい（木）」
- 「書いてある」
- 「魚の小骨」
- 「（こちらに）来なさい」
- 「（ある人が）いらっしやった」
- 「（行く）まい」
- 「寝ることができない」
- 「読むことができない」

「(帽子を) かぶる」  
 「おはようございます」  
 「つむじ」  
 「かたぐるま」  
 「かぼちゃ」

質問の形式は、「はぶてる」と「やねこい」を除いて、あらかじめ選択肢を提示し、選択肢にないものは「その他」として自由記述してもらった。「はぶてる」と「やねこい」については、それぞれハブテルとヤネコイという語形を使用するか否かを質問し、もし使用しない場合には、使用する語形を具体的に記入してもらった。

なお、本稿においては、それぞれの語彙項目を表示するときには「」で囲んで示し、語彙を構成する個々の語を表示するときにはカタカナ表記をしている。

### 3. 結果と考察

本稿の分析においては、語彙の異なり語数をおもに扱う。語を量的に取り扱うときには、延べ語数で測る方法と異なり語数で測る方法とが一般的である。さらに、数量的な分析には、延べ語数のほうがより扱いやすい。本稿であえて異なり語数を用いている理由は、言語社会内に共存している語彙を記述する場合を、想定しているからである。方言の語彙を記述するときには、その言語社会内で相互に相違している語を採集することが多い。何回使用(回答)されたあるいは何人が使用(回答)したということに先だって、その方言事象が「ある」という事実がまずは重要だからである。

以下、五つの観点から17項目の語彙に分析を加える。

#### 3.1 語の性格

調査で得られた語の異なり語数を示すと、〈表3〉のようになる。最少の「書いてある」と「(行く)ま

い」が3語、最多の「(こちらに) 来なさい」が21語となっている。語彙によってこれほどの差がある理由は、各調査項目の性格によると考えられる。

語数が比較的少ない項目は、

「はぶてる」  
 「書いてある」  
 「(行く) まい」  
 「(帽子を) かぶる」

である。このうち、「書いてある」と「(行く) まい」は、音声上の変異を調査する項目である。「書いてある」においては、カイトアル、カーテアル、キヤートアルの三種類しか音変化が認められない。「(行く) まい」においても、(行く) マイ、(行く) マー、(行かん) メーの三種類しかない。同一語源の語形に関しては、その語形の音変化のバリエーションには、必ずと限界があると考えられる。

次に、「はぶてる」と「(帽子を) かぶる」は、動詞の語彙を質問する項目であった。「はぶてる」には、ハブテルのほか、オコル、スネル、フクレルの回答があった。これらの回答を比較すると、それぞれの語の担当する意味領域が、少しずつずれているのではないかと思われる。質問文は、「子供がおこって、ふくれ面をしました。このような状態になることを『ハブテル』と言いますか。」という文面であった。この質問文のどこに注目したかによって、回答された語に相違がでてきたと考えられる。「(帽子を) かぶる」については、共通語形と方言形とが同一語源であるため、語尾変化と音変化が主である。語としては、カブク、カズク、カブル、カズルが回答されている。

一方、語数の多い項目をみると、

「(こちらに) 来なさい」  
 「(ある人が) いらっしゃった」

表3 全体の異なり語数

| 調査項目        | 語数 | 調査項目        | 語数 |
|-------------|----|-------------|----|
| 「はぶてる」      | 4  | 「(行く) まい」   | 3  |
| 「やねこい」      | 10 | 「寝ることができない」 | 7  |
| 「自転車」       | 6  | 「読むことができない」 | 8  |
| 「へんてこりんなもの」 | 14 | 「(帽子を) かぶる」 | 4  |
| 「大きい(木)」    | 11 | 「おはようございます」 | 13 |
| 「書いてある」     | 3  | 「つむじ」       | 11 |
| 「魚の小骨」      | 7  | 「かたぐるま」     | 13 |
| 「こちらに来なさい」  | 21 | 「かぼちゃ」      | 6  |
| 「いらっしゃった」   | 15 |             |    |

「へんてこりんな (もの)」

「おはようございます」

「かたぐるま」

が挙げられる。「(こちらに) 来なさい」、「(ある人が) いらっしやっ」と「おはようございます」は、待遇法に関する項目である。回答時にどのような場面を想定して回答したかによって、さまざまなバリエーションが生じていると考えられる。「(こちらに) 来なさい」の質問文においては「隣の奥さんに対して」、「(ある人が) いらっしやっ」においては、「近所の親しい人に向かって」という限定条件を付しているにもかかわらず、多数の回答が得られている。

「おはようございます」に関しても、どのような発話相手や発話場面を想定しているかが語の相違に反映していると考えられる。そのほか、「おはようございます」では、年齢が語の選択に大きく関与している。つまり、オハヨーアリマシヤやオハヨーガンスは老年層を中心に回答され、オハヨーゴザイマスは幅広い年齢層(老年層から青年層)から回答されている。

「かたぐるま」は、従来の調査・研究においても、語彙量の多い項目として知られている。言語地図に描くと複雑な分布を示す(注2)。本調査においても、カタグルマをはじめ、カタウマ、キンマ、クリンバ、タカウマ、テングルサン、テングルマ、ピンブク、ブンブク等、さまざまな語が得られた。これは、広島県内の各地から、高屋町へ移住してきた回答者がいることと、「かたぐるま」の各語は分布域が狭く、比較的狭い地域内でも複数の変種を持ちうるものが、その理由と考えられる。

「へんてこりんな (もの)」については、質問文の理解のしかたに幅があり、少しずつ意味のずれた語を回答していることが、語数を増加させる原因になっていると考えられる。

### 3.2 年 齢

年齢層ごとに、異なり語数の変化を示したものが、

(注2) 『日本方言大辞典』(徳川, 1989)<sup>4)</sup> p. 772 の言語地図および同書 p. 1117 の民俗語彙「かたぐるま」の項。また、「カタグルマの方言分布」(柴田, 1988)<sup>5)</sup> では、新潟県の一六六集落に長野県の一五集落と富山県の一集落とを加えた合計一七二集落を、しらみつぶしに調べた結果、カタグルマの里言として七九個の異なる語が収集されている。

<表4>である。この表から次の四つの傾向が見いだされる。

#### ①語数の変化の少ないグループ(8項目)

「やねこい」

「大きい(木)」

「書いてある」

「魚の小骨」

「(ある人が) いらっしやっ」

「(行く) まい」

「(帽子を) かぶる」

「つむじ」

#### ②年齢が下がるほど語数が減少するグループ(2項目)

「はぶてる」

「かぼちゃ」

#### ③年齢が下がるほど語数が増加するグループ(2項目)

「自転車」

「へんてこりんな (もの)」

#### ④40歳代を頂点とする山型を描くグループ(5項目)

「(こちらに) 来なさい」

「寝ることができない」

「読むことができない」

「おはようございます」

「かたぐるま」

まず、①のグループについては、30歳代から60歳代以上まで、ほぼ同数の語を保持しているわけである。しかし、その内容は、さらに次のような二つのグループに分類できる。

①-a. 各年齢層を通じて、語がほとんど入れ替わらないグループ。例えば、「(帽子を) かぶる」は、全年齢層から、カブル、カブク、カズク、カズルの四種類の語が得られている。これと同様の項目としては、「書いてある」、「魚の小骨」、「(行く) まい」がある。

①-b. 語数の上では変化が少ないが、語の入れ替わりの多いグループ。例えば、「(ある人が) いらっしやっ」においては、キチャツ、キテジャツ、コラレタ(コラレマシタ)、キンサツが全年齢層で見られる。しかし、これらの語は、異なり語数15語中4語にすぎない。他の11語は、各年齢層で回答されたり、されなかったりしているのである。これと同様の傾向をみせる項目はほかに、「やねこい」、「大きい(木)」、「つむじ」がある。

②のグループは、方言形消失の傾向を示している。「かぼちゃ」においては、60歳代以上で、カボチャ、ナンキン、ポーブラ、ポーフリ(ボウフリ)の四語が

表4 年齢と異なり語数

| 調査項目        | 30歳代 | 40歳代 | 50歳代 | 60歳代以上 |
|-------------|------|------|------|--------|
| 「はぶてる」      | 1    | 3    | 3    | 2      |
| 「やねこい」      | 7    | 4    | 6    | 5      |
| 「自転車」       | 6    | 5    | 4    | 2      |
| 「へんてこりんなもの」 | 11   | 10   | 6    | 6      |
| 「大きい(木)」    | 6    | 8    | 7    | 8      |
| 「書いてある」     | 2    | 2    | 2    | 3      |
| 「魚の小骨」      | 6    | 6    | 5    | 6      |
| 「こちらに來なさい」  | 9    | 15   | 7    | 11     |
| 「いらっしゃった」   | 10   | 9    | 9    | 8      |
| 「(行く) まい」   | 2    | 3    | 2    | 2      |
| 「寝ることができない」 | 3    | 6    | 4    | 4      |
| 「読むことができない」 | 6    | 7    | 8    | 5      |
| 「(帽子を) かぶる」 | 4    | 4    | 4    | 4      |
| 「おはようございます」 | 8    | 11   | 10   | 7      |
| 「つむじ」       | 6    | 7    | 5    | 8      |
| 「かたぐるま」     | 4    | 8    | 7    | 6      |
| 「かぼちゃ」      | 2    | 3    | 4    | 4      |

回答されている。これが、30歳代になると、カボチャ、ナンキン<sup>3)</sup>の二語に減少してしまい、ポーブラ系の語が姿を消してしまう。

③のグループのように、年齢が下がるほど、語数の増加する項目もある。「自転車」は新方言の生まれている語彙として従来から取り上げられている(注3)。本調査においても、60歳代以上から30歳代へ向けて、2→4→5→6と語数が増加している。60歳代以上においては、ジテンシャ、ジデンシャの2語しか回答されていないが、30歳代では、ジテンシャ、ジデンシャ、チャリンコ、チャリ、ケッタ、ドッテンシャの6語が回答されている。一方、「へんてこりんなもの」に関しては、前述したように、質問文の理解のしかたに幅のあることが、30歳代へ向けての語数の増加に反映されたものと考えられる。ただし、年齢の高い層において語数が減少している点については、年齢が高くなるほど、紋切り型の表現をしがちになるとも考えられる。

最後に、④のグループに属する語を取り上げる。このグループのように、40歳代に山ができる原因をすぐさま究明することはできないが、次の2点は指摘でき

よう。

1) 40歳代が最も回答者数の多い年齢層であること。本稿では、異なり語数に注目して分析を進めている。一人だけがある語を回答していても、10人が回答していても、ともに「1」とカウントしている。つまり、語の個人的な変異が反映されやすいのである。回答者数が多くなると、それだけ個人的な変異が出現しやすくなる。このことが、語数の多さに現れている。

2) 40歳代の回答者は、自分よりも年齢の高い人と、年齢の低い人ととの両者と接する機会が最も多い年齢層なのではないか。目上の相手、同世代の相手、目下の相手の三者に対する語を保持しているため、語数が増加しているとも考えられる。「(こちらに) 來なさい」や「おはようございます」といった、待遇法に関わる項目については、この点を考慮する必要がある。

### 3.3 性別

男性と女性との間の語数の違いを示したものが<表5>である。また、<表5>の右半分は、男女の間で相違する語数を合計したものである。

<表5>から語数の上では、男性の方が女性よりも多いことがわかる。男女間で相違する語数の多い項目は、「やねこい」、「へんてこりんなもの」、「(こちらに) 來なさい」、「(ある人が) いらっしゃった」、

(注3) 『関西方言の動態に関する社会言語学的研究』(徳川, 1987)<sup>6)</sup> p. 43 および p. 101。

表5 性別と異なり語数

| 調査項目        | 男性 | 女性 | 相違している語の合計数 |
|-------------|----|----|-------------|
| 「はぶてる」      | 4  | 3  | 1           |
| 「やねこい」      | 9  | 7  | 4           |
| 「自転車」       | 6  | 4  | 2           |
| 「へんてこりんなもの」 | 12 | 10 | 4           |
| 「大きい(木)」    | 10 | 8  | 2           |
| 「書いてある」     | 3  | 2  | 1           |
| 「魚の小骨」      | 6  | 6  | 2           |
| 「こちらに来なさい」  | 13 | 17 | 12          |
| 「いらっしやった」   | 15 | 9  | 6           |
| 「(行く)まい」    | 3  | 2  | 1           |
| 「寝ることができない」 | 6  | 5  | 3           |
| 「読むことができない」 | 7  | 7  | 2           |
| 「(帽子を)かぶる」  | 4  | 4  | 0           |
| 「おはようございます」 | 13 | 8  | 5           |
| 「つむじ」       | 9  | 9  | 4           |
| 「かたぐるま」     | 10 | 9  | 7           |
| 「かぼちゃ」      | 6  | 4  | 2           |

「おはようございます」、「つむじ」、「かたぐるま」である。男女間でまったく相違のない項目は、「(帽子を)かぶる」だけである。

男性と女性との間で相違を見せる語には、次のような傾向がある。

①方言色の濃い語

②音変化を起こしている語

③社会的に男性語あるいは女性語と認識されている語

①の例としては、「やねこい」のコワイ(男)、セツイ(男)、「(ある人が)いらっしやった」のオイデンサッタ(男)、キンシャッタ(男)、「(こちらに)来なさい」のキテミンサイ(女)、「おはようございます」のオハヨーガシタ(男)等がある。なお、語の後ろの(男)あるいは(女)は、その語を回答した方の性別である。

②は、①と重複する点もあるが、語形の一部が音変化を起こすことによって、丁寧さが損なわれたり、方言色が濃くなると考えられる。例としては、「やねこい」のエラー(女)、シンデー(男)、「大きい(木)」のフテー(男)、「書いてある」のキヤーテアル(男)、「おはようございます」のアーシタ(男)、オハヨーシター(男)等がある。

③は、とくに待遇表現において見られる。「(こちらに)来なさい」のキテミ(男)、キテミテ(女)、キテ

ミンサイ(女)、キチャッタラ(女)、「おはようございます」のオハヨー オス(男)、オハヨーサン(男)等の例がある。

### 3.4 居住地域

これまで、自然発生的集落の居住者について述べてきた。高屋町は農村地域であるが、近年その中に、多数の新興住宅地が建設されている。その数は年々増え続けており、広島市のベッドタウンの一角を形成しつつある。高屋町の中に、農村地域と新興住宅地という、異質な生活環境を持つ地域が共存している。そこで、新興住宅地の中からマツダ社宅を取り上げて、高屋町の自然発生的集落と比較してみる(注4)。

<表6>が、両者の回答を示したものである。一部の項目を除いて、語数の点では、両者の拮抗していることがわかる。

自然発生的集落からは、30歳代以上の各年齢層から万遍なく回答を得た。これに対して、マツダ社宅は、人為的に作られた集落であるため、年齢構成には偏りがあった。マツダ社宅においては、30歳代が男性全体

表6 居住地域と異なり語数

| 調査項目        | マツダ社宅 | 自然発生的集落 |
|-------------|-------|---------|
| 「はぶてる」      | 6(2)  | 4(0)    |
| 「やねこい」      | 8(1)  | 10(3)   |
| 「自転車」       | 7(2)  | 6(1)    |
| 「へんてこりんなもの」 | 13(2) | 14(3)   |
| 「大きい(木)」    | 10(2) | 11(3)   |
| 「書いてある」     | 3(0)  | 3(0)    |
| 「魚の小骨」      | 6(0)  | 7(1)    |
| 「こちらに来なさい」  | 12(2) | 21(11)  |
| 「いらっしやった」   | 10(0) | 15(5)   |
| 「(行く)まい」    | 2(0)  | 3(1)    |
| 「寝ることができない」 | 8(2)  | 7(1)    |
| 「読むことができない」 | 10(3) | 8(2)    |
| 「(帽子を)かぶる」  | 4(0)  | 4(0)    |
| 「おはようございます」 | 13(0) | 13(0)   |
| 「つむじ」       | 15(5) | 11(3)   |
| 「かたぐるま」     | 14(5) | 13(4)   |
| 「かぼちゃ」      | 4(0)  | 6(2)    |

注：( )内の数字は、相互に異なっている語の数

(注4) マツダ社宅の調査においては、308人の広島県出身者から回答を得た。

の55.5%，女性全体の51.2%を占めていた（女性の20歳代も女性全体の42.6%）。40歳代以上の回答者は、男女ともに少なかった。また、マツダ社宅には、高屋町（あるいは東広島市）以外からの移住者が多いものと考えられる（注5）。自然発生的集落とマツダ社宅との間には以上のような違いがあるにもかかわらず、両者から得られた回答の異なり語数には、それほど差がない。

次に、語の異同をみてみよう。〈表6〉の（ ）内には、両地域の間で異なっている語の数を示している。語の異同に関しては、「（こちらに）来なさい」、「つむじ」、「かたぐるま」が多くなっている。

「（こちらに）来なさい」において、自然発生的集落で多数の表現が回答された理由は、その社会構成が複雑であるためであろう。相手や場面によって使い分ける必要から、多数の表現を用意していると考えられる。また、自然発生的集落からは、方言色の濃い表現も得られている（キナハエー、キナサランカ等）。一方、マツダ社宅からは、キンチャイが得られている。マツダ社宅には、20歳代、30歳代の女性が多いためであろう。

「つむじ」と「かたぐるま」については、マツダ社宅の方が、語数としてやや多くなっている。この理由は、広島県内の各地から移住してきた人が、自然発生的集落よりも、社宅に多く住んでいるためであろう。

### 3.5 回答者数

〈図1〉は、各語の回答者数を横軸に、その数の回答者を有する語を縦軸にとって分布を示したものである。このグラフの特徴は、両側に高い山が見られることである。

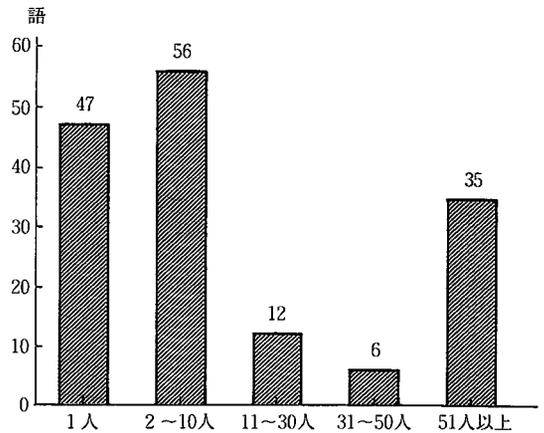


図1 回答者数別の語数分布

回答者を51人以上有する語は、35語ある。各項目に1語から4語、このような語がある。語は、社会的な性格を持っているため、社会の構成員が共通する語を保持していなければコミュニケーションが成立しない。それと同時に、同様の意味を表現する語が十も二十もあっては、記憶の負担がたいへんである。言語の伝達性と経済性の点からいっても、少数の語に多数の回答者が集中するのは、当然のことと言える。

しかしながら、言語には、きわめて個人的な側面もある。回答者数が一人だけの語が47語（30.1%）、2～10人の語が56語（35.9%）ある。このように個人差の大きい原因としては、次の三点が考えられる。

① 回答者の出身地域に広がりが大きく、東広島市出身以外は、特定の出身地にまとまった数の回答者がいないこと。分布域の狭い語は、地域差が反映されやすい。「つむじ」や「かたぐるま」では、一人だけの語と2～10人の語とが、語数の8割程度を占めている（「つむじ」11語中9語、「かたぐるま」13語中10語）。

② 全国共通語あるいは地域共通語と個人語とを使い分けしていること。「自転車」においては、ジテンシャを大半の回答者が答えている一方で、チャリも複数回答している場合がある（7人）。また、この使い分けには、老年層における共通語形と方言形との使い分けもある。「おはようございます」では、ほとんどの回答者がオハヨーゴザイマスを回答している。それと同時に、オハヨーアリマス、オハヨーアリマシタ、オハヨーゴザンシタ、オハヨーガンシタ、オハヨーガンス等を複数回答している場合がある。

③ 意味内容に微妙なずれのあること。「（こちら

（注5） マツダ社宅の調査においては、残念ながら、回答者の出身地を詳しく質問することができなかった。これは、調査の準備段階でマツダ株式会社と協議した結果である。調査時に居住者とかわした会話や会社側の説明から、広範な地域からの出身者のいることが予想できる。調査項目の「つむじ」と「かたぐるま」の結果もそれを裏付けている。『広島県方言辞典』（村岡、1981）<sup>7)</sup>には、「つむじ」の語彙が11語、「かたぐるま」の語彙が32語収録されている。マツダ社宅の調査からは、「つむじ」13語、「かたぐるま」14語が得られている。自然発生的集落においては「つむじ」11語、「かたぐるま」13語が得られている。

に) 来なさい」や「(ある人が) いらっしやっ」においては、回答時に想定する場面が、回答者ごとに微妙に異なっていると考えられる。質問文では、「隣の奥さんに」と「近所の親しい人に」という限定を付してはいるが、実際にどんな隣人が住んでいるかは、回答者によって違っている。各自が想定した相手や状況によって、やや丁寧に言ったり、普通に言ったり、ごく親しい間柄ならややぞんざいに言ったりするであろう。このため、「(こちらに) 来なさい」では一人だけの回答が10語、2～10人の回答が8語、「(ある人が) いらっしやっ」では一人だけの回答が4語、2～10人の回答が8語となっている。しかし、回答者の少ない語には、イラシテクダサイ、オイデナサイ、キテクレマセンカネ、キテゴラン、キテミ(テ)、キマセンカといった語が含まれており、場面によっては多数の人が使用する可能性がある。今回の調査では、回答時に想定した場面にそぐわなかったために落されることが多かったであろう。このような場合にも、少数の人しか回答しない語が増加する。

#### 4. おわりに

一つの地域社会から得られた資料でも、分析の切口を変えると、さまざまな姿を見せる。本稿で取り上げた語彙項目の多様性には、語自体の性格はもとより、言語社会の構成員の属性も関与している。

ある語彙を形成する語が音変化に基づく変異しか持っていない場合には、さほど多くの変種はない。同一語源の語の変異についても同様のことが言える。「(行く) まい」や「(帽子を) かぶる」において、異なり語数が少ないのはそのためである。これに対して、待遇法に関わる語彙では、多彩な語(あるいは表現)が見られる。これは、回答時に想定される場面の複雑さに由来するものと考えられる。誰が、誰に、誰のことを、どこで、どのような雰囲気の中で、話すのかを考慮しなければならないからである。待遇法の表現のしかたは、きわめて多彩である。一語の敬語動詞を用いて表現するか、分析的な語構成を用いて表現するかといった選択の幅もある。

分布域の広さも、語の種類を増減させる要因になる。「つむじ」や「かたぐるま」を構成する語のように、分布域の比較的狭い語は、変種を持ちやすい。

次に、言語社会の構成員に起因する側面もある。本稿では、分析対象者を高屋町在住の広島県出身者とし

た。分析対象者には、年齢、性別、出身地などの面でさまざまな属性を持つ人が含まれている。語には、年齢や性別の軸にそってその数や種類を変化させるものもあれば、させないものもある。さらに、年齢や性別に加えて出身地の要素が入ると、語の示す姿が多様性を増す。語と回答者数との関係を見ると、一人だけが回答している語と2～10人が回答している語とを合わせると、全体の語数の66.0%を占めている。少数の回答者しか持たない語がこのように多い理由は、年齢や性別との関わりもあろうが、回答者の出身地の相違も大きく関与している。生え抜きという条件や居住年数といった条件を付して、調査対象者を選抜しない場合には、このような状況が生じる。回答者数の少ない語をどのように扱うかが、一つの言語社会を記述したり、分析したりするときに問題となろう。その言語社会の何を記述するかという調査目的にもよるけれども、出身地の相違する人のことを単なる夾雑物として扱ってよいか否かは検討の必要がある。

地域社会の構成がますます複雑さを増すにつれ、そこで営まれる言語生活も多様な様相を呈してくる。そのとき、一つの言語社会をまるごと記述するためには、社会の変化に対応した方法論が必要となろう。

#### 参 考 文 献

- 1) 国立国語研究所 1951 言語生活の実態 秀英出版
- 2) 真田信治 1990 地域言語の社会言語学的研究 和泉書院
- 3) 神鳥武彦・高永 茂 1991 方言使用と生活環境——社宅居住者と自然発生的集落居住者—— 広島文化女子短期大学紀要, 第24号 pp. 1-8
- 4) 徳川宗賢 監修 1989 日本方言大辞典 小学館
- 5) 柴田 武 1988 方言論 平凡社
- 6) 研究代表 徳川宗賢 1987 関西方言の動態に関する社会言語学的研究
- 7) 村岡浅夫 1981 広島県方言辞典 南海堂

【謝辞】 調査にあたっては、東広島市高屋町の皆様方に多大なご協力を得た。また、本稿を成すにあたっては、広島大学学校教育学部教授 神鳥武彦先生から助言をいただいた。ここに名を記して、深謝の意をあらわすものである。

### Summary

The aim of this paper is to examine some features and problems of description of lexical items in a community. The speech-styles of natives in Hiroshima prefecture are analysed from five viewpoints. A Language in a community is so heterogeneous that the description of lexical items in a language is complex and troublesome. This study shows that 17 lexical items have 156 variants in one community and a number of variants belong to each lexical item varies from both social factors and linguistic factors. We need to improve a method, which can specify “minorities” in lexical items that are not so common.